

学療法として施行したが、その際に5-FU濃度測定を施行した。

【結論】5-FUを用いた化学療法で血清5-FU濃度測定によるTDMを施行した3例を報告した。

21 当科における胃癌肝転移切除の成績

會澤 雅樹・藪崎 裕・松木 淳
金子 耕司・神林智寿子・丸山 聡
野村 達也・中川 悟・瀧井 康公
佐藤 信昭・土屋 嘉昭・梨本 篤

県立がんセンター新潟病院消化器外科

【目的】胃癌肝転移に対する肝切除の意義について検討した。

【対象・方法】1980年から2010年に当科で根治切除を行った胃癌肝転移87例(同時性53例,異時性34例)における全生存率と予後因子について検討した。

【結果】切除後の1年,3年,5年の全生存率はそれぞれ71.0%,28.0%,18.8%,生存期間中央値は19.9ヶ月で,5年以上の長期生存症例は13例であった。単変量解析では原発胃癌壁深達度,リンパ節転移,リンパ管浸潤,肝転移個数及び切除前血中CA19-9値が術後生存と相関し,多変量解析では肝転移2個以上が独立した予後不良因子であった。切除後再発症例は71例で再発形式は残肝再発が29例で最も多く,リンパ節転移4例,肺転移2例,腹膜播種1例,多臓器再発16例であった。

【結論】胃癌肝転移の切除で長期生存を得る症例は限定されるが,今回の検討では肝転移個数が最も有意な予後予測因子であった。

22 粘膜下層浸潤胃癌(SM胃癌)に対する術後補助化学療法の適応についての検討

羽入 隆晃・小杉 伸一・石川 卓
市川 寛・坂本 薫・若井 俊文

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【はじめに】ACTS-GC試験の結果,Stage II/III胃癌に対する術後補助化学療法は標準化されたが,比較的予後が悪いと考えられるリンパ節転移陽性SM胃癌は適応となっていない。

【対象・方法】1995～2012年に外科的切除を行ったSM胃癌259例の予後を検討し,術後補助化学療法の適応について考察した。

【結果】全例の5年全生存率(5yOS)は91.1%であった。リンパ節転移は30例11.6%に認め,生存解析でリンパ節転移陽性が唯一の予後不良因子であった(5yOS pN0:93.2%,pN1:80.6%,pN2:64.3%, $p=0.027$)。リンパ節転移陽性症例30例の5yOSは79.8%であり,同時期のリンパ節転移陽性固有筋層浸潤胃癌26例の5yOS76.3%と同等であった($p=0.721$)。

【結語】リンパ節転移陽性SM胃癌へ術後補助化学療法を導入することで予後を改善する可能性がある。

II. 特別講演 消化器癌の分子標的治療について

国立がん研究センター東病院
早期・探索臨床研究センター先端医療
科長/消化管内科長

土井 俊彦